

中部大会速報

15 岐阜県 岐阜農林高校

リアリティを追求

多方面の協力を得て、作り上げた舞台

26日、岐阜農林高等学校(岐阜県)が「S(アイス)」を上演。バスケットボールや合唱などを取り入れ、演劇部とは思えない、迫力のある作品だった。上演後、キャスト、演出の方にインタビューした結果をまとめた。

脚本の作成

創作にした理由は、バスケットボール部が強い農業高校として、同部を題材とした劇を上演したかったからだ。また、農業高校とバスケットボールを上手く組み合わせたいという思いもあった。

作成にあたり、主にキャストがグループに分かれた後、テーマにそってエチュード(即興劇)を行った。そこで面白いと思ったものを複数採用し、組み合わせ一つの劇にした。

上演にあたって

上演まで、非常に長い期間の練習があった。特に中部大会に向けての練習は、十二月二十五日までかかった。

大道具は一ヶ月ほどで完成した。しかし、劇中での合唱のシーンはなかなか上手くできなかったため、発声練習の際に合唱の練習もする

など、様々な工夫を行った。こだわりの演出

最も苦労したのはバスケットボールをする際の動きだ。存在しないバスケットボールを、実際にあるように見せる工夫が難しかった。そのため、バスケットボール部の練習を見学し、研究するなど、多くの苦労があった。上



いちごアイスを食べる五十嵐先生。

発行

第68回中部日本高等学校演劇大会生徒実行委員会 広報

2015年

12月26日

作品名

S(あいす)



練習試合をする女子バスケット部。

演の際、実際にボールがあるように感じさせるため、ボールを床についた時の音を音響が流すなど、リアリティを追求した。

バスケットボールをプレイする場面の稽古では、キャスト自身が実際にボールを使って練習したり、動画を使って研究したりした。結果、ボールを使わずに、バスケット

トボールをプレイする様子を表現できたのだ。

想定外のアクシデント

発表直前にホールを借りて稽古した際に、キャストが膝をケガしてしまった。そのためキャストが交代する必要がある、非常に困った。その他にも、バスケットボールをプレイする場面では、稽古中に膝を痛めるキャストが多かった。特にS役の堀江は、大会本番の2週間前に肉離れになってしまい、完治しないまま本番を迎えるという苦労があった。

本番を終えて

上演が終わった時、三年生の部員は、高校生活で最後の上演であるため号泣した。(担当)齋藤、安永、中川、藪下、松川

創作 Original